『JOSHUA JOESTAR』

佐島　五十郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＤＩＯの息子であり『スタンド使い』である『ヨシュア・ジョースター』は、海鳴市で母の形見である『スタンドの矢』を追っていた。▼そんなある日、彼の血縁だと名乗る男『空条　承太郎』とその道案内をしてきたという『高町なのは』に出会う。▼魔導師とスタンド使いの入り乱れる海鳴市でヨシュアはどういった活躍をみせるのか。▼スタンド使いと魔導師の邂逅は物語にどんな変化をもたらすのか。▼ジョジョの奇妙な冒険と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバー作品です。▼ストーリー展開が原作から大幅に乖離すると思いますのでご了承ください。

目次

Ｓｔａｎｄ　ｕｐ ―――――― 1
空条承太郎！ヨシュア・ジョースターに会う ―――――― 10
ｏｕｖｅｒｔｕｒｅは静かに奏でられる「ジュエルシード」 ―――――― 18
ｏｕｖｅｒｔｕｒｅは静かに奏でられる「管理世界のスタンド使い　その１」 27
ｏｕｖｅｒｔｕｒｅは静かに奏でられる「管理世界のスタンド使い　その２」 40
眠れる奴隷 ―――――― 49

Stand up

母が亡くなってからは、毎日がただのルーティーンの繰り返しだった。
色あせた日々のなかで母の死を思い出さないように、心を空っぽに、また意識も薄くする。
そして、母が亡くなったと聞かされて、おおよそ一か月くらい経った頃だった。
いつも通りに部活を終え、帰路につき、玄関のかぎを開け、未だ母の温もりの残るリビングでソファに腰かける。
目を瞑っていると、今は亡き母の面影が思い出された。
「死にたい」
思わず、声に出してしまったこの言葉。
一日のすべてが終わった後の空白の時間に押し寄せてくるこの感情。
母の為に、生きねばとは思う。しかし、そう思えば思うほどに、そのたびに思い出される母の死が、奮い立たせた勇気を粉々に打ち砕く。
「そういえば――」
ふと、部屋の隅に置いていた母の形見のトランクが目に入った。

旅好きの母はよくあのトランクで単身旅行に行っていたものだ。思えば、母が亡くなってからは、開けたことは一度もなかったように思う。

そうこう考えを巡らせているうち、いつの間にか鍵に手をかけていた。

普段の彼ならば、母を思い出したくないという理由でトランクを己から遠ざけただろう。

しかし、今まさに、彼はトランクを開けようとしている。それはまるで――いやまさしく引力だった。母の残滓（トランク）と彼の間には確かに引力があった。

そして――

――突如、謎の痛みに襲われた。

その痛みがトランクから飛び出てきた謎の物体が手に突き刺さったことでもたらされたものだと分かった時には、もはや意識は痛みに支配されてしまっていた。

「が、あああああッ――」

熱い、あつい、アツイ――

手の甲から進行してきたナニカは、まるで死にたいのなら殺してやるよとでも言うようにゆっくりと首元を狙う。

このままでは確実に死んでしまう。さっきまで死にたいと考えていた人間とは思えない思考が頭を巡った。

――だから、「死にたくない」と必死で叫んだ。
自分にはまだ生きる意志があるんだと世界に知らしめるように。
瞬間、彼の体から一本の剛腕が現出する。
剛腕は命を絶とうとしている物体――矢じりを力任せに引き抜くと、そのままの勢いで、キッチンの方へ放り投げた。
やがて、ドサリと彼の体は地面に伏した。
後には、開きっぱなしのトランクと一冊の手帳、未だクルクルと回り続ける矢じりが残され、何事もなかったかのように辺りはシイーンとした静寂に包まれた。
青年の名はヨシュア・ジョースター。
のちに海鳴市を発端としたスタンド使いたちの攻防の中心となる人物である。
＊＊＊
翌日、ヨシュアは学校を休んだ。
理由は、母の残した手帳と謎の矢じり、そして自分に取り憑いた守護霊のようなものの正体を見究めるためである。
もう彼に死への願望などない。
昨日の痛みを彼は母親からのメッセージと受け取ったからだ。
手帳には、驚くべき事実が記されていた。

母は血縁上ヨシュアの母親ではないこと。
母がかつてＤＩＯという吸血鬼の臣下だったということ。
そして、ヨシュア自身が、そのＤＩＯの息子だということ。
他には、彼に取り憑いた守護霊の正体にも言及があった。
曰く、守護霊のようなものの正体は、『スタンド』と呼ばれる超能力である。
曰く、『スタンド』を目視することができるのは『スタンド使い』のみである。
曰く、『スタンド』は持ち主である本体の意思で動く。
曰く、『スタンド』は特殊能力を最低一つ持っている。
何かの冗談かと思った。
だが、信じなければ、自分のそばに現れ立つ(Stand by me)この巨漢の男に説明がつかなかった。
次いで、矢じりについてだが、母の手帳にはこれについての言及が全くなかった。
しかし、体に突き刺さった後に、スタンドが発現したところを見ると、少なくともスタンドと何かしらの関係があるだろうという推測が立てられる。
「ムーンチャイルドッ」
意思の力を込めて、己が守護霊スタンドの名を叫ぶ。スタンドは雄たけびをあげながらヨシュアの身体から出現する。
その容姿はまるで美術館の彫刻のようだった。

黄金のボディのいたるところに波紋の意匠がされており、悠然と立つその姿に神秘的な印象を与えている。
「ひとつ、スタンドの力を試してみるとするか」
言うと、ヨシュアは玄関から家を出て、深い夜の下に繰り出した。
深夜二時、海鳴市民の大半が寝静まったであろうこの時刻。
だが、夜の街を闊歩する不良少年たちは違う。
彼らは街を練り歩きながら、自分たちのストレス発散の捌け口を毎夜探しているのだ。その対象にはヨシュアも含まれる。
彼には父親から受け継いだとされる金髪があり、よく街の不良たちに絡まれてきた。
丁度いいからそいつら相手にスタンドを試してみようと思ったのだ。
「おい、テメェ。今、ガン飛ばしてきたよなァ」
早速、絡まれた。話しかけてきた不良の後から、ぞろぞろと数人の不良たちも現れる。
「ガンなんて飛ばしちゃあいないよ。ただ、群れなきゃなにもできないアンタらに侮蔑の視線を送っただけさ」
「あんだとぉ?ガキのくせによォ、粋がってんなら切り刻んでやるよぉ――!!」
不良の懐から取り出したアーミーナイフでの攻撃が、戦いの火ぶたを切った――
「ムーンチャイルドッ!!」

迫る不良のナイフ。しかし、ムーンチャイルドは圧倒的な力で不良の腕の骨をそのナイフごとへし折った。
「ウゲブェ〜!!俺の……おれのうでがぁ〜〜〜!粉々にぃ〜〜〜!」
「安心しろよ。ちゃんと治るよう加減はしたぜ」
他の不良たちはすっかり怯えてしまっていた。
ひとりでに仲間の腕がへし折れるという目の前のありえない現象を受け入れられないのだ。
「アンタらもかかってきなよ。生意気なガキを叩きのめすんじゃあなかったのか?」
「ひいいああ」
やけになって、不良たちは一斉に襲い掛かる。
手に武器なんぞ持っておらず、たとえ持っていたとしても勝ち目などないというのに。彼らはもう頭が混乱して、目の前の危機を正しく認識できていなかった。
「無駄だァ!」
彼らの攻撃はやはり無意味に終わる。
ムーンチャイルドのラッシュは彼らの頭を正確に打ち、意識を昏倒へと追いやった。
「さて、腕試しはここまでかな。騒ぎを聞きつけて警察がこちらに向かって来ているようだし……」

スタンドが最低一つは持っているという特殊能力を拝むことはできなかったが、収穫もあった。
それはヨシュアのスタンド、ムーンチャイルドが接近戦で威力を発揮するスタンドだと知れたことだ。
逆に遠距離に行くことはできないということも判明した。
「おっと、今はそんなことを考えている場合じゃあないようだな」
パトカーのサイレンはもうすぐそこだ。
ヨシュアは見つからぬよう慎重に、だが素早く帰路に就いた。
＊＊＊
家に着いたのは、丑三つ時も過ぎた深夜4時だった。
帰る途中、警察とバッタリ遭遇するなんていうハプニングがあったが、それもうまく切り抜けることができた。
「疲れた……」
ドッカリとソファに全身を預ける。
一昨日まではこのソファに腰かけると辛い思いに苛まれた。
しかし、今は違う。
あの痛みに耐え、スタンドを獲得したことで母に「生きろ」と言われた気がしたから

だ。
リビングを見渡してみると、母との思い出が浮かんでは消えていく。
ふと、母のトランクが目に入った。その次に手帳。そして――
違和感、あるべきものがないという強烈な違和感。
「……ない、矢じりが――ないッ！」
確かに手帳の横に置いておいたはずだ。
それなのにもかかわらず矢じりは忽然とその姿を消していた。
必死に他の部屋も探したが、やはり見つからない。
何者かに盗まれたとでもいうのか、家の鍵は施錠しておいたはずなのに。
盗まれたと考えるのならば、それはきっと恐ろしいことだ。
現金や貴金属が盗まれていないところをみると矢じりだけを狙ったのだと考えられる。ならばなぜだ？目的は？
「まさか、他のスタンド使いが……？」
大いにあり得る。密室で窓ガラスが割られた形跡もなく、ヨシュアのいないうちに素早く盗めるものはスタンド使い以外に思いつかない。
近いうち海鳴市でなにかがおこる。その予感がヨシュアにはあった。
「とにかく探しださないと」

ここ海鳴市で運命の歯車はゆっくりと廻り始めた。

空条承太郎！ヨシュア・ジョースターに会う

海鳴市。平凡なこの街に一人の奇妙な出で立ちの男が訪れた。

１９０㎝以上の上背に白の厚手のコートを纏い、同じく白の左手の平のマークが意匠された帽子をかぶったこの男。

名前は空条承太郎。

彼はこの街に住んでいるという、ＤＩＯの息子であり、またジョースター家の血統でもあるヨシュア・ジョースターに会うため、ここ海鳴市へやって来た。

「やれやれ。こんな分かりやすい名前のヤツを今まで、ＳＰＷ財団が見つけられなかったとはな」

ＳＰＷ財団は、世界中に散らばったジョースターの血を受け継いでいる人間を探し出してきた。

今までで東方仗助、汐華初流乃など発見されている。

承太郎は、ＳＰＷ財団職員に渡された住所のメモを見やり、路線バスを利用することにした。

バスの中には帰宅時間なのか、下校中の学生が多く見られた。

白い特徴的な制服を着ているのは、私立聖祥大付属小学校の生徒たちだ。
ヨシュア・ジョースターは確かこの私立大学付属学校の高等部に在籍していると聞いている。
話によると、かなりの不良生徒のようであるが、成績だけはいいので退学を免れているようだ。
（わたしもそうだったが、ジョースター家はどうも不良が多いようだ……それに加えＤＩＯの血も受け継いでいる。面倒なヤツでなければいいのだが……）
そんなことを考えているうちに、バスから見える風景は移り変わっていく。
現在、バスは閑静な住宅街を進んでいる。
メモによるとどうやらヨシュアはこの辺りに住んでいるらしい。
この辺りでいいかと思い、承太郎は、降車ボタンを押しバスを停車させ、降りると、住宅街の中を歩いて行った。
住宅街というのは存外入り組んでいるもので、土地勘のない者は容易に道を見失ってしまうものだ。
それは承太郎も例外ではない。
こんなときには手っ取り早くその土地の者に道を聞いてしまうのが一番だ。
そこで承太郎は、自分からみて道の向かい側を歩いてくる一人の栗色のツインテール

の少女に尋ねることにした。
「君、少し道を尋ねたいのだが……」
「ふえ?道……ですか?」
「ああ……この辺にジョースターという姓の家があるはずなのだが、どこか知らないだろうか?」
「ジョースターさんですか?それなら知ってます!お向かいさんなんです!ついてきてください、道案内しますから。あっあと、わたしの名前、高町なのはっていいます」
「そうか……よろしく頼む」
ヨシュア・ジョースターの家は意外にもすぐに見つけることができた。
その家は、承太郎の進んできた道沿いにあったので、内心、己を恥じながら玄関のインターホンを押す。
赤い屋根の大きな庭のある家。
その中から出てきたのは、金髪のエキゾチックな風貌の青年だった。
身の丈は１８０㎝ほどだろうか、ジョースター家の人間にしては、やや細身ではあるが、その眼からは確かにジョースター家特有の強い意志の力が感じられる。
「君がヨシュア・ジョースターか?」
「そうだが、アンタは誰だ?一体どんな目的で来た?」

「わたしは空条承太郎。君とは少し複雑な血縁関係になるな。そして――単刀直入に言うが、君は知らないかもしれないが、君の父親を殺したのはわたしなのだ。」
「なっ!?」
承太郎は『殺した』の部分だけなのはに聞かれぬよう声を潜めたが、それでもヨシュアに衝撃をもたらすには十分すぎた。
しかし、彼は別に『殺した』という部分に驚愕したのではない。
「そうかアンタがあの・・空条承太郎だったのか、スタープラチナの空条承太郎だったのか。しかしなぜだ?なぜオレの前に現れる?」
そうヨシュアが驚愕したのは、空条承太郎という男が自分の前に現れたことそのものだった。
普通は父親の仇がその息子の前に現れたりはしないからだ。
「オレを殺しに来たのか?ＤＩＯの息子であるオレを」
それしかありえない。
そう思い迎撃態勢に入ろうとするヨシュアを承太郎は手で制した。
「違う。わたしは君に危害を加えるつもりはない。だが……その様子だと知っているようだな。君の父ＤＩＯのことも、――そしてスタンドのことも!!」
「ああ、だが、知らないこともある。オレとアンタが血縁関係?だったか?ゆっくり聞か

せてもらおう」
　そういって承太郎をリビングに案内しようとするヨシュア。
「そうだな、だがその前に……」
　承太郎の視線の先には先ほど道案内をしてくれたなのはがいた。
　彼女はすっかり置いてけぼりを食らってしまって、ちょっとおろおろしていた。
「……すまないな、なのは。わたしは彼と話をしなくてはならない」
「は、はいっ。気になさらないでください!」
「お向かいさんには後でオレが菓子折りでも持っていこう」
　そこでなのはとは別れることになった。
＊＊＊
「さて、まずはわたしと君が血縁関係にあるということから話そう……。その昔、わたしの高祖父、ジョナサン・ジョースターと吸血鬼ディオ・ブランドーは激闘を繰り広げてきた。死闘の末、ジョナサンは勝利したかに見えたが、ディオは首だけとなって生きていた。そして――あろうことかディオはジョナサン・ジョースターの首から下を乗っ取ったのだ。この意味がわかるな……?」
「……つまりオレはそのジョナサン・ジョースターの息子でもあるということか?」
　そうだ、と承太郎は頷く。

「だが、君はあまり気にする必要はない。なにかあればＳＰＷ財団が援助してくれるはずだ。……それよりも今、問題なのは君のスタンドのことだ……。スタンド使い同士は引かれ合う。君も心当たりがあるだろう？」

ゴクリ、と知らず知らずのうちにヨシュアは生唾を飲み込んでいた。

実際、承太郎の言う通りだったからだ。

ヨシュア自身は何も意識していなくても、いつの間にか出会ってしまうことは多かった。

それで戦闘になるということも……。

「……いつからだ？ いつ能力スタンドを発現した？」

「……四年前さ。四年前、あの『矢じり』に貫かれてから……」

「なにッ!? 矢じりだとッ？ 今どこにあるッ!?」

「やはり、知っていたか。だが今ここにはない。盗まれてしまったからな」

「ということは、この街にもスタンド使いがいるということか……」

「ああ……それも用意周到で頭の切れるヤツがな。だから追ってる」

それから承太郎はヨシュアといくらか問答を重ね、ついに帰ることとなった。

もうすっかり日は沈み、街は闇を湛えていた。

「この街には危機が迫っている。わたしは、一度戻ってＳＰＷ財団に援助を頼むが、君も

独自で矢じりの調査をしておいてほしい。しかし、君も一応の注意はしておいた方がいいだろう」

言うと、承太郎はまたもと来た道を帰って行った。

海鳴市の闇に消えるその背中。

今夜は特に黒が深い。

それにヨシュアはどこか不吉な予感を感じてしまった。

内心そんな心配性な自分にうんざりしながら、玄関のドアを閉める。

まだ夜は始まったばかりだ。

＊＊＊

（聞こえますか?僕の声が……聞こえますか?）

闇夜に響く、少年の声。

まだ変声期を迎えていないのだろうその声は、『魔法』と呼ばれる技術によって三人の受信者に届けられた。

一人目は、高町なのは。

まだ目覚めてはいないが、魔法に関しては天賦の才をもつ少女。

二人目は、空条承太郎。

スタンド『スタープラチナ』を持ち、数多の困難を打ち破ってきた男。

そして三人目は、ヨシュア・ジョースター。
スタンド『ムーンチャイルド』を従え、近い将来ジョースターの運命に導かれるだろう青年。
（聞いてください、僕の声が聞こえるあなた。お願いです、僕に少しだけ力を貸してください！）
暗夜の海鳴市を三人はひた走る。
その眼に迷いなどない。

ｏｕｖｅｒｔｕｒｅは静かに奏でられる「ジュエルシード」

「聞いてください、僕の声が聞こえるあなた。お願いです、僕に少しだけ力を貸してください！」

少年の声が聞こえる。

まだ変声期も迎えていない幼い声が。

頭に直接響くその懇願に、今まさに床に就こうとしていたヨシュアは思わず顔をしかめた。

「スタンド使いか？人がせっかく気持ちよく寝ようとしていたのに……」

悪態をつきながらも身体に掛けかけていた毛布をはぎ、速やかに準備を始める。

時計を見上げると、短針は９時をさしていた。

一般人ならおそらく空耳だと断じただろうこの声。

だが、ヨシュア・ジョースターはスタンド使いである。

この程度の異常には慣れているし、矢の手がかりを見つけるためでもある。

夜分遅くとも出張るのは必定であった。

玄関から出て視界いっぱいに広がってきたのは、夜の闇だった。
月明りすら差さない底冷えするほどの闇は、これから起こるであろう不吉の象徴のよう。
声の主の居場所は、不思議と頭で理解できていた。
どの道を進めばいいのか。
どの角を曲がればいいのか。
そしてその場所が、槙原動物病院のほど近くにあるということも。
ヨシュアは、その頭の地図に従って歩を進めた。
一つ目の曲がり角を右へ、二つ目を左へ、十字路は直進。
ほどなくして、手前の家屋の影から動物病院の姿が見えてきた。
「恐らく……このあたりだ。さて鬼が出るか、蛇が出るか。どちらにせよ叩きのめすのは必至だがな」
その呟きに呼応するように、
突如――右方からけたたましい爆発音が響いた。
同時に、コンクリートの破片がヨシュアに向かって勢いよく飛び散る。
「無駄無駄ァ!!」
彼は、向かってくる破片をムーンチャイルドのスピードラッシュで迎え打つ。

コンクリートのつぶては、嵐のような突きで一瞬のうちに粉々の塵となった。
爆発の原因、それは塀が圧倒的なパワーによって打ち砕かれたこと。
そして――その塀を打ち砕いたのは……
「やはり……！スタンドッ!!」
それは人型だった。されど人間ではない。
大きく膨れ上がった体に異様に長い腕を持ち、禍々しい黒い霧のようなオーラがその体を渦巻いている。
「ＧＲＵＵＵＡＡＡＡＡ――!!」
咆哮とともに長腕のラッシュがたたき込まれる。
鈍重だが、ムーンチャイルドをも超えるパワーをもつ拳。
――単に受けるだけでは押し負けるッ
ヨシュアは直撃を避けるべく、いなし、受け流すことで防御する。
受け流すだけでも凄まじい衝撃がムーンチャイルドを介して彼自身に伝わる。
「……本体が近くにいないことから察するに自動操縦か。パワーが強いという観点から考えるに遠隔操作の線はない。だが、妙なことに気づいたぞ。こいつからは、黒い執念のオーラを感じるが、逆にそれ以外はなにも感じないのだ。純粋な執念のみ……そこが

奇妙なのだ。こいつ本当にスタンドなのか？」
「そうだ、ヨシュア。そいつはスタンドのようでスタンドでないものだ……」
背後からした声。
振り返るとそこにはやはりというべきか承太郎の姿があった。
だが、ただ一つ予想していなかったことといえば、彼がフェレットを肩に乗せた少女、高町なのはをともなっていることか。
「そして、その正体はこのフェレットもどきが知っている……だが――」
「――この状況じゃあ話せない……ということだな？ならば速攻で片づけてやる」
瞬間、ヨシュアはスタンドの瞬発力を利用して、刹那のうちにスタンドもどきの間合いに入る。
「ウショオオオアア!!!」
眼前に迫るスピードラッシュ。
このままでは直撃する。
もし直撃すれば、ヨシュアの頭蓋骨はやすやすと粉砕されてしまうだろう。
しかし、ヨシュア・ジョースターはそんなことは意に介した様子もなく、超然の様相で歩き進む。
万が一にでも当たることなどないとでも言いたげな自信満々の表情を顔に貼り付け

て。

「すでにオレはアンタに触れている。そのときからとっくに能力は発動していたのさ」

故に、スタンドもどきの拳は悉く空を切る。

当たらない、当たらない、まったくもって当たらない。

スタンドもどきのラッシュが意図的にヨシュアを躱しているようなそんな錯覚すら覚えてしまう。

「アンタに強い催眠をかけさせてもらった。ラッシュをいなしたときのその一瞬のうちにな」

そう、ヨシュアのムーンチャイルドの能力は触れたものに催眠をかけること。

つまり、スタンドもどきは無意識のうちにヨシュアを避けてラッシュを放っていたということだ。

「今度はオレの番だ……それだけ暴れたんだ、もう満足だろう？速やかに送ってやるよ、地獄へ」

拳を固く握り力を迸らせる。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄……無駄ァ!!!!」

スタンドもどきの身体にムーンチャイルドの連撃が叩きこまれる。

うねりを上げるラッシュは徐々に身体をひしゃげさせ、最後の一撃は大きくスタンド

もどきをフッ飛ばした。
「よし……じゃあ話の続きをしようじゃあないか」
フッ飛ばしたヤツはすぐさま消滅し、最後には深い青の宝石があっけなく転がるだけだった。
＊＊＊
「……へえー、それであのスタンドのようでスタンドではないやつは、触れた者の望みを叶えると言われているジュエルシードなる宝石によってうまれというわけか。それで、なのはは魔法少女というヤツで、フェレットのユーノは魔導師と……信じる信じないは別として、アンタは信じたのか、承太郎？」
「概ねではあるが信じることにした。実際わたしは彼女がスタンドではない特殊能力を行使したのをこの目で見ている……実際に見てみればいい。……なのは、ジュエルシードに封印を施してくれ」
「はいっ……リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル２１。封印！」
『ｓｅａｌｉｎｇ．ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＸＩ．』
なのはが呪文を唱えると、持っていた杖から翼が生えた。
同時に、上部の宝石からシュルシュルとピンク色の長いリボンのようなもの伸び、ジュエルシードを包み込む。

「これで、ジュエルシードの完全な封印ができました。やったね、なのは」
フェレットが言う。
「うん！本当によかった。それで……ヨシュアさん、信じてくれますか？」
懇願のようななのはの上目遣いがヨシュアを貫く。
「信じるしかないんだろうな……よもやスタンド使い以外でこんなに驚かされるなんて」
しかし、この後に来る、驚愕はこの比ではなかった。
「それにしても、ヨシュアさんはすごいですね。スタンド？でしたっけ？あんなに強そうなおっきな男の人をだすなんて」
「なんだって!?」
「えっ!?」
「スタンドが視えるのか!?」
驚愕に次ぐ驚愕。
それを説明するのだろう、ユーノが口を開いた。
「それについては僕から説明します。実はスタンドと呼ばれるレアスキルは僕の世界にも存在します。そして、スタンドのヴィジョンは僕ら魔導師にも視えるんです。皆さんが知らないのは管理外世界という魔法も魔導師も存在しない世界に住んでいるが故な

んでしょうけれど……」
スタンドのルールの崩壊。
大前提の破棄。
けれど、承太郎はいつでも冷静である。
「スタンド使いと魔導師には何らかの共通点があるのか？」
落ち着き払った承太郎の質問にユーノが答える。
「魔力を蓄積するための器官、リンカーコアに関係があると思われます。だけど、まだ確かな照明にはなっていません」
「そうか、可能ならばＳＰＷ財団にも連絡し、調べさせておくか」
「承太郎。そろそろお開きにしないか？もう１１時だ。子供の寝る時間はとっくに過ぎている」
ヨシュアのこの言葉を最後に、この場のおいての会議のようなものは一旦終了となった。
寝ぼけ眼のなのはは家族の待つ温かい住まいへ。
承太郎は海鳴市内のホテルへ。
ヨシュアはパンク気味の頭を抱えて、一人しか住む者がいなくなって久しい赤い屋根の家へ。

それぞれ、あるべき場所へ帰る。
海鳴市は依然として、闇に沈んだままだ。

ｏｕｖｅｒｔｕｒｅは静かに奏でられる「管理世界のスタンド使い　その１」

あれから、数日が経った。
ジュエルシードはすでに２１個中５個がなのはによって集められ、順調に見えた。
（……スタンドは僕らの住む管理世界では、レアスキルという認識であることは以前話しましたよね？）
（……ああ）
ヨシュアと承太郎は念話でユーノから管理世界のスタンド使いについて教示してもらっていた。
なのはは日々のジュエルシード集めの疲れからか部屋で熟睡しているとのことなので、こういった話にはお誂え向きの時間だ。
（遠い昔からスタンド使いは存在していたと言われています。それこそ魔法が生まれる前から。魔法はそのスタンドという才能に近づこうとする技術という説もあります。）
（スタンドは精神の作り出す力（パワー）ある像（ヴィジョン）……。君の世界に存在していても何らおかしくない。しかし、我々のスタンドと君の世界の魔法にそんな関係があったとはな……）

（スタンドと魔法には歴史だけじゃあなく、もっと密接な関係があります。それはリンカーコアです）
（そういえば、オレがあのジュエルシードの化け物をブチのめしたときもそんなことをいっていたな）
（ええ。リンカーコアとは魔導師の体内にある魔力の源のことですが、スタンド使いの身体にもあることが確認されています。リンカーコアについてはまだ確かな解明は為されていませんが、おそらく、魔導師がスタンドを視認することができる原因はここにあるだろうと言われています）
（そうか。どうやら君の世界の者はスタンドについて我々より詳しい部分があるようだ。）
（そうでもありません。今や魔法はスタンドより万能であるとみなされていますから、ほとんど研究が進んでいないんです）
（ＳＰＷ財団ではスタンドについての研究が進んでいる。知識提供の為だけではないが、ぜひ君の世界の代表とコンタクトが取りたい）
（僕は管理世界の一魔導師でしかありません。そんな権限はありませんが、ジュエルシードの問題が解決できれば、その機会を得られるかもしれません）
　その答えに承太郎は満足そうに、そうかと返した。

このジュエルシード騒動とスタンドの矢が盗み出されたこと、根拠はないが感覚でなにか関係があるように思える。

承太郎とユーノの会話を聞きながらヨシュアはそんなことを考えていた。

スタンドと魔法、管理世界ならまだしもこの地球で絡み合うはずのないものが、なにかの因縁か海鳴市を中心に絡み合おうとしている。

そんな風に思えて仕方がなかった。

＊＊＊

そして事態は突然にそれも当然のように起きた。

ヨシュアの脳に鋭い感覚が走った。

なにかに共鳴するように……、その共鳴しているものの正体をヨシュアは知っていた。

「ジュエルシードだッ……。それにものスゴク強いぞ、この感覚ッ」

（承太郎さん！ヨシュアさん！）

（ユーノか!?）

（ジュエルシードが発動しました！僕となのはは現在その場所へ向かっています！皆さんも急いで！）

（……わかった）

「オレもすぐに向かう。しかし、なにか嫌な予感がする。魔法がらみじゃあなく、スタンドがらみの嫌な予感がな」

言って、二階の自室の窓を開く。

桟に足をかけ、そこから思いっきり跳躍した。

窓から斜め上の方向に８ｍほどジャンプし、向かいの家の屋根に着地する。

ヨシュアの『ムーンチャイルド』はパワータイプのスタンドだ。

だからそんな芸当もできる。

その家はなのはの家だったが、いまは緊急事態だ。

家の中から「なのはか？出かけてくるんじゃなかったのか？」という声が聞こえてきたが、聞かなかったことにする。

そうして屋根伝いに跳躍しながら引き付けられる方向に向かっていると、だんだんと異変の様相が見えてきた。

巨大化した木々、まるでファンタジーやメルヘンにでも出てきそうな大樹の群だった。

ヨシュアはその数ある大樹の一つに着地すると、異変の中心を探し始めた。

「ジュエルシードの発動をこの身体で感じることができたのならば、その位置を探知することができるはずだ」

精神(こころ)を澄まして、ジュエルシードの存在を探り出す。
——瞬間、ヨシュアの身体を第六感的な危険予知の感覚が襲った。
「ムーンチャイルドッ!!」
すかさず防御する。
猛スピードで迫るその赤黒い物体を。
「良い反応だ。さすがだな。若きスタンド使いよ」
しわがれた声。だが、芯の通ったような声だ。
「その木の陰にいるのはわかっている。姿をみせろ」
予想に反してその男は素直に陰から姿を現した。
そして、予想通りソイツは老人だった。
「この状況にまったく動揺していないことから察するに、じいさん、アンタこの世界の住人じゃあないな? 恰好から魔導師でもない。アンタはスタンド使いだ。ねらいはジュエルシードか?」
「ご名答。そういう君もただの現住のスタンド使いではないようだ。魔導師や魔法に何らかの関りがあるのだろう?」
「答える義理はない」
ヨシュアのその言葉に老人は大きく肩をすくめると、

――即座に攻撃を仕掛けてきた。
またしても赤黒い物体が空気を薙ぐ。
それをヨシュアは再び『ムーンチャイルド』で防御する。
その防御は完璧に見えた。
だが――、
「なにッ!?」
ポタリ……、ポタリ……と、ヨシュアの腕から血液が滴り落ちる。
老人の攻撃は防がれてなどいなかった。
「そのスタンド……一瞬だが視えた。血液だ。血液を操るスタンドか!!」
「よくわかったな、少年よ。わしのスタンド『ブラッド・スウェット・アンド・ティアーズ』は血液によりその像（ヴィジョン）を描く!」
老人が腕を薙ぐ。
すると背後から血液が噴出し、渦巻き、そして、やがて人型の像に変化した。
とっさにヨシュアは距離をとる。
「良い判断だ。わしから３ｍの範囲に近づけば即座に君の血液は暴走し、身体を破裂させるだろう」
なぜ敵にその能力を教えるのかヨシュアには理解できなかったが、ヨシュアにとって

そんなことは些事だった。
老人の血液のスタンドの射程距離は５ｍほどだ。
だがヤツに『ムーンチャイルド』を叩きこもうとして３ｍの範囲に入ってしまえば死ぬ。
死ぬ前にそれこそ一瞬で叩きのめし、再起不能にすれば、能力は解除されるが……
『ムーンチャイルド』の射程距離は２ｍ、やはり一手足りない。
取れる選択肢は一つだけ。
「５ｍ範囲外からの遠距離攻撃だけだッ」
『ムーンチャイルド』で石ころを投球する……はずだった。
「うぐぅ」
それは老人のうめき声ではなく、ヨシュアのものだった。
「またもや良い判断。遠距離攻撃はこの状況では最善手であるといえるだろう。だが、最善手とは相手からも読みやすいもの。その判断は実は悪手だったのだよ」
槍がヨシュアの両腕と胴体から生えていた。
正確には凝固した血液の槍が。
「脳と心臓を狙ったが、咄嗟にガードしたのか……。いずれにせよ君はもうわしには勝てん。一つ質問をする。みたところ君はデバイスを持っていない。ジュエルシードの

封印にはデバイスがいる。仲間はどこだね？」
「ぐッあ……答える義理は……ないッ……」
「まあ、良い。おおよそ検討はつく。あのビルの屋上から魔力が感じられた。魔導師はあそこだ。ジュエルシードを集めるには、封印する魔導師を押さえるのが一番効率が良い」
　――コイツは危険だ。いくらなのはが稀代の天才魔導師だろうと、経験あるこのスタンド使いには勝てない。
　――コイツはッ！オレが倒さなくてはならない敵だッ！コイツをッ！なのはのもとへ行かせてはならないッ！
「待て……ッ」
「なんだね？君はもうしゃべることも億劫だろう？横たわって死ぬ前に家族に思いでも馳せたらどうかね」
「純粋な疑問なんだ。なぜアンタは自分のスタンド能力の秘密やらをそうベラベラとしゃべる？」
　時間稼ぎではない本当の心からくる疑問だった。
「スタンドとは精神の発露だからだ。君に話すことでわしは成長できる。あえて自分を逆境に置くことでスタンドは成長する!!」

そう話す老人の顔には、僅かな喜色の表情が浮かんでいた。
おそらくそれがこの老人の美学なのだろうとヨシュアは思った。
「わしはそうやってスタンド使いとして生きることで、ここまでの力を得たのだ!!」
「なら、オレもアンタを見習って成長しなくちゃならない。」
「なに?」
「オレはヨシュア・ジョースター。スタンドの名はムーンチャイルド。能力は相手を催眠にかけること」
コイツを倒す、それには成長が必要だ。
あえて逆境に身を置く、そのための暴露。
「そして、オレは成長するッ!うおおおおおお……!」
両の腕と胴体を貫いた血液の槍を引き抜く。
その咆哮はまるで宣言のようだった。
自分の生きる道を宣言するようだった。
「なにをやっているッ!?」
二度目の血液の槍が発射される。
それをヨシュアは血だらけの『ムーンチャイルド』のラッシュで弾き飛ばした。
「なに、アンタに成長した姿を見てほしいだけさ」

ヨシュアの顔にはもう苦悶の貌はない。
あるのは超然の表情だけだ。
「良い顔だ」
対して老人もニヤリと笑う。
さきほどの動揺はもうない。
二人のこの様相はまさしく決闘だった。
「アンタ、さっき動揺したよな？」
「ああ、わしは動揺した。だが、それがどうした」
「ならそれが付け入る隙ってやつさ」
――老人が動く。
再度、血液を槍状に凝固し、血液のスタンドがそれを放つ。
槍は確かにヨシュア・ジョースターに当たったかに見えた。
少なくとも、老人からは。
「催眠には、大雑把にいって二つの方法があると言われている。何らかのプロセスを踏む……例えば、身体に触ったりしてかけるもの、そして、会話の中で誘導してかけるもの」
ヨシュアは依然として超然の表情をしてそこに立っていた。

遅れて老人は気づく。
血液の槍はヨシュアをそれて奥の大樹に突き刺さっていることに。
「動揺がオレのスタンド能力のトリガーだ。アンタに勝つためにそういうふうに成長したのだッ」
老人に近づく。
５ｍの範囲へ。
スタンドは動かない。
そうして３ｍの範囲に踏み込んだ。
「アンタの能力はもう発動しない」
「わしも焼きが回ったか。だが、自分の美学に敗れるのも悪くない」
『ムーンチャイルド』がヨシュアの背後に発現する。
「いくぞ――、無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄……無駄ァ!!!」
スタンド名：『ブラッド・スウェット・アンド・ティアーズ』　本体：名も知らない老人……再起不能（リタイヤ）

＊＊＊

目が覚めて最初に見えたのは白い天井だった。
ここが病院であることはボーっとした病み上がりの脳でも理解できた。

気配がしたので、右隣を見ると、そこにはやはりなのはがいた。
彼女は心配そうにこちらをのぞき込むと、突然口を開いた。
「ごめんなさいっ!!ヨシュアさんはわたしを守ってくれたんですよね？わたしがあのとき気のせいだなんて思わなかったら……」
いきなりまくし立てるなのは。
それにヨシュアは思わず眼が点になってしまった。
「おいおい、いきなりまくし立てないでくれ。それにあれはキミのせいなんかじゃあない。いずれ起こっていただろう必然だったんだ」
「でも……」
いまにも泣き出してしまいそうななのはをどうにか慰めたくて、ヨシュアは言葉を紡ぎだした。
「オレは今日成長した。成長しなくてはキミを狙うスタンド使いを倒すことはできなかった。キミも同じはずだ。キミの瞳には成長者の持つ黄金の輝きがある。これは推測だが、キミは街を襲う大規模なジュエルシードの猛威を目にして後悔したしたはずだ。さっきのように気のせいだなんて思うんじゃなかったという風にな。だが、それは失敗ではない。その後悔は教訓となり、キミの成長への一歩を照らし出す陽の光になる」

こんな大仰なセリフをヨシュアは吐いたことなどなかったが、なぜだか言葉は自然に出てきた。

その後、なのははひとしきり泣いた。

ヨシュアはただ見守るだけだった。

こんな状況は不得手だったが不思議と気まずいだなんて感情は起こらなかった。

ｏｕｖｅｒｔｕｒｅは静かに奏でられる「管理世界のスタンド使い　その２」

翌日の昼、病院に承太郎が見舞いに来た。
お見舞い品は持って来なかったが、その代わり重要な情報を仕入れてきたようだった。
「あの老人を尋問した結果、わかったことがある。老人の名前はデヴィッド・クレイトン・トーマス。スタンド名『ブラッド・スウェット・アンド・ティアーズ』。ヤツはヤツ自身が答えた通り管理世界のスタンド使いだった。目的はロストロギア――ジュエルシードの回収。依頼主は……残念ながら、自白剤を用いても口を割らせることはできなかった。おそらく、何らかの能力または魔法を使われて記憶ごと消されたのだろう。一か月前、雇われたヤツは数名のスタンド使いと海鳴市に入り、活動を開始……」
承太郎の言葉に引っ掛かりを覚えヨシュアはベッドから身体を起こした。
「ちょっと待て。一か月前……？ユーノが念話を飛ばしたのはつい一週間前のはずだ」
話の腰を折ったヨシュアに対して、承太郎は特に文句を言わず続けた。
「そう……。スタンド使い達の最初の目的はジュエルシードではなかった。『矢』だった

のだ。ヤツらはお前の家から『矢』を奪った後、その『矢』を管理世界へ転送し、追加の指令を受けた。それがジュエルシードの回収というわけだ」
「それじゃあどれだけ探しても見つからないわけだ。すでにこの世界にはないんだからな」
「……ああ。そして、ヤツのおかげで分かったことがある。この街は危険であることだ。スタンド使いがそこら中に潜んでいる。杜王町のように」
それに頷くヨシュア。
「どこだろうと安心できない。……たとえ病院だろうと。気づいているか？空条承太郎」
病院はしんと静まり返っていた。
病院が静かなことは当たり前のことといえるが、静寂にしては冷たすぎた。
「ああ。この張り詰めた空気。まるでユーノの封時結界だ。すでに私たちはスタンド攻撃を受けているッ」
ヨシュアには病院の天井や壁や床が敵意を持っているように感じられた。
事実、その感覚に誤りはなかった。
――なんの前触れもなく、ヨシュアの頭上の天井が落ちる。
まるで押しつぶすかのように。

「上だッ!!ヨシュアッ!!」
咄嗟にベッドから転がり落ちて身を躱す。
「ぐッうぅッ」
衝撃が老人との戦いによって受けた傷に響いた。
続けざまに今度は壁がヨシュアと承太郎に向かって迫る。
病室のベッドもイスもお構いなしに押しのけながら、まるで病室という空間が閉じるように迫りくる壁を見て承太郎が叫ぶ。
「窓だッ!病室の窓から飛ぶぞッ!立てるか、ヨシュア!」
「問題ない。痛みはもう感じない。このムーンチャイルドの能力でッ」
すでに自分自身に催眠をかけていた。痛覚を封じる催眠を。
そしてすかさず窓から飛んだ。
ヨシュアの病室は二階にあったが、承太郎もヨシュアもパワー型のスタンドを持っているため怪我をすることはない。
だが、敵スタンドは逃走を許すほど甘くはなかった。
まず白い床が見えてきた。
次いで連続してならぶたくさんのイス。
ヨシュアが落ちた先は病院の内部。

受付ロビーだったのだ。
「承太郎はッ!?」
彼は忽然と姿を消していた。
彼らは敵スタンド使いにまんまと分断させられてしまったのだ。
「まずいな、この状況。これでは四方を敵に囲まれているも同じだ」
「その通りよ。管理外世界のスタンド使いさん」
女の声が受付ロビーに響く。
続いてコツコツとヒールで階段を下る音が聞こえた。
「本体自ら姿を現すとは良い度胸だな」
階段から現れたのはやはり女だった。
だが、ヨシュアには奇妙に思えた。
この手のスタンド使いは能力の維持にスタンドパワーを使うため、近距離は不得手のはずだ。
この女はその弱点を自ら弱点を晒していることになる。
「度胸じゃあないわ。必要だからするの。アタシ、勝算のない戦いはしないシュギなのよ」
「オレを甘くみたな」

奇妙だが、本体を倒せば能力は解除される。
今、叩かなければならない。
弱点をみせた今が好機だ。
「無駄無駄無駄ッ!!」
すかさずラッシュを打ち込む。
――『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.』
紅色の障壁がヨシュアのラッシュを阻んだ。
「な、にッ?オマエはまさかッ!?」
女は不敵に微笑んだ。
「アタシはスタンド使いであり、魔導師でもあるの。そして、驚愕とともに死になさいッ!!」
驚きによる一瞬の隙を逃さずに、魔力弾がヨシュアへ殺到する。
「ぐッあああ!」
痛みはない。
だが、このまま撃たれ続ければいずれ肉体は破壊される。
「あらあら。尻尾を巻いて逃げちゃうの?」
そう、ヨシュアは逃走という選択肢を選んだ。

だが、戦意を喪失したわけではない。
ヨシュアはある一つの仮説を証明するために走るのだ。
――空間を閉じられるのなら、ヤツは姿を見せなくともよかったはずだ。必要だから見せたんだ！
予想通り天井が迫る。
女が空間を閉じようとしている。
「間に合えッ!!」
空間が完全に閉じる瞬間、ヨシュアは扉が開け放たれた診療室に飛び込んだ。
ドスンッ！と背後で閉じる音がする。
かつて受付ロビーだった場所はもう何もない黒い空間と化していた。
診療室はしんと静まった。
「やはりだ……。ヤツは一度に一部屋しか閉じられないんだッ！加えて、ヤツはヤツ自身がいる部屋しか閉じられないッ。次に閉じるのはあの女が現れたときだッ!!」
――その瞬間に！『ムーンチャイルド』を叩き込んでやるッ！
……長い静寂があった。
一生続くかとも思われたそれは、
ガラスが砕ける音によって破られた。

病院の外につながる窓から五発の魔力弾が飛来する。
よく見れば、外の黒い空間にあの女の姿が薄く見えた。
「臆したな。ムーンチャイルドッ!!無駄無駄無駄ッ！」
『ムーンチャイルド』は紅色の魔力弾を蹴り返した。
まるでサッカーのシュートのように。
五発の魔力弾は全て女に向かって反射され、その全てを女は被弾した。
「その選択を選んだ時点でアンタは負けていたのさ。オレとの決闘を拒んだ時点で。ビビった精神にオレのスタンドが負けるはずがない」
女は為す術なく黒い空間へ堕ちていった。
＊＊＊
それから数日間は、ジュエルシードの発動もなく、スタンド使いの襲撃もなく、ヨシュアは怪我の治療に専念できた。
海鳴市の病院では、どこにスタンド使いが潜んでいるかわからないため、ＳＰＷ財団の治療を受けることにした彼だったが、ＳＰＷ財団の技術力には驚かされた。
傷はほとんど見えなくなり、内臓もほとんど元通りになった。
むしろ前よりも調子が良いくらいだった。
「ウン？あれはなんだ？人か？」

時刻は９：４７。
襲撃はしばらく無さそうなので、久しぶりの夜歩きをしていたヨシュアだったが、途中に奇妙なものが目に入った。
距離５０ｍほど先の建物の鉄塔の上に少女が立っていた。
その少女は黒い衣装を身に纏い、今にも闇に消え入りそうだったが、月明かりに照らされた黄金色の髪は、それを打ち消すほどの存在感を放っていた。
表情は見えなかったが、どこか寂しそうなその様相にヨシュアはしばらくの間、見とれてしまっていた。
もっと近くで見たくなって、一歩進む。
しかし、その間少し目を離した隙に少女はどこかへ消えてしまった。
彼女は何者なのだろうか。
時刻はもう１０：００を回っている。
あんな少女がこんな時間に、あろうことか鉄塔の上に立つなんて普通じゃあない。
少なくともジュエルシード騒動の関係者かもしくはこれから関係する者だろうと、ヨシュアは考えた。
あの少女は予告なのだろうか。
この事件がこれからどんどん危険になっていくという。

ヨシュアだけでなくなのはまで命の危機にさらされてしまうのだろうか。

――胸騒ぎがする。

ヨシュアの胸中には一抹の不安があった。

眠れる奴隷

なのはが敵の魔導師と遭遇し、倒された。
しかし、病院に搬送されたり、入院したりするほどの怪我を負ったわけではなかったのは幸いだった。
そして、このジュエルシード事件に、スタンド使いの襲撃やなのはを撃墜した魔導師などによって明確な『敵』が浮かび上がってきた。
そこで、ヨシュアらは今後のジュエルシード集めについて話し合いを行うことにした。
場所は承太郎の泊まっている海鳴市のホテル。
ヨシュアとなのはとユーノはそのホテルまで一緒に行くことにした。
「そういえば、ヨシュアさんって承太郎さんと血が繋がっているんですよね？」
「そうだったな。思い返してみれば、なのはにオレや承太郎のことを詳しく教えたことはなかったな」
それからバス停に着くまでなのはに話してやることにした。
ヨシュア・ジョースターという人間のことを。

＊＊＊

１９８８年１２月２４日、エジプト・カイロにてヨシュアは誕生した。

父親はＤＩＯ、母親はＤＩＯの配下のスタンド使いであった。

ＤＩＯにとって、ヨシュアは取るに足らない存在であったが、母親にとってはそうではなかった。

彼女はヨシュアを連れて逃げた。

ＤＩＯの気まぐれからか、幸運にも彼女らは攻撃されることなく日本まで逃げ切ることができた。

母は優しい女性であった。

しかし、同時に危険なスタンド使いの殺し屋でもあった。

そういう生き方しか知らない女だった。

それでも、彼女はヨシュアに善の道を説き続けた。

それが、その気高さが彼を真っ直ぐに育てた。

不遇な生まれでもヨシュアは卑屈にならずに済んだ。

「……素敵なお母さんだったんですね」

「ああ……そうだな」

なのはにはＤＩＯのことや母親が殺し屋であることはボカして伝えた。

自分の身の上話を、しかもこんなに小さな子どもにするのは初めてだったが、彼女はこの話をなにか意味のあるものとして消化してくれたようだった。
「確か……このバス停から直接行けるんだったよな」
「はい！」
バスのなかでもなのははヨシュアのことについて聞きたがった。
兄以外の異性の年上の話が興味深いからか、なのははとても熱心に聞いていた。
このひとときは、さながら砂漠のオアシスのようだった。
＊＊＊
「ジュエルシード事件に介入する者が現れたのは、皆の共通理解だと思う」
テーブルを挟んでヨシュアの向かいに座る承太郎が口を開く。
「私とヨシュアはスタンド使いに、なのはとユーノは魔導師に各々遭遇している。そこで、ジュエルシード事件の介入者への対策を考えたい。まずはユーノ君、なのはを倒したという魔導師について君の考えを聞かせてくれ」
「はい。黒いバリアジャケットに金色の髪の女の子でした。彼女は間違いなく僕と同じ世界の住人です」
「金色の髪に黒い衣装だと？」
当たってほしくない予想が当たってしまった。

やはり彼女は『敵』だった。
「あの子、なにか理由があると思うんです」
今度はなのはが言う。
「それには私も同感だ。私達を襲ったスタンド使いは容赦のない奴らだった。昏倒させて、そのままとどめをささずに帰るのには違和感を感じる」
それからは、スタンド使いについてなのは達に説明した。
スタンドには初見殺し的な側面が強いため、スタンド使いに遭遇した場合、すぐにヨシュアや承太郎に念話を飛ばし、逃走しろということも伝えた。
すべての事柄を伝達し終わった後、承太郎はなのはとユーノを帰らせた。
一緒に帰るかと尋ねられたが、ヨシュアは部屋に残った。
承太郎に引き留められたからだ。
「金髪の少女について心当たりがあるようだな……」
さすがの洞察力。
心を読む能力でも持っているのかと錯覚しそうだ。
「……ああ。以前、見掛けたことがある。たしか、隣の遠見市だった」
「そうか……。気を付けろ」
彼はヨシュアがこれからどのような行動にでるのか、もうすでに予想済みなのだろ

う、承太郎はそれだけしか言わなかった。

＊＊＊

心当たりがあるといっても、少女の正確な位置がわかっているわけではない。

だから、遠見市のあの鉄塔を中心に捜索することにした。

こういう場合は、聴き込みが最適だ。

この日本で金髪は大層目立つ。

金髪のせいでよくヤンキーに間違えられ、因縁を付けられる自分がそうだからだ。

「……ああ、見たよ。とっても可愛い娘っ子やった」

「ちなみにどの辺りで？」

「あのマンション辺りだったかねえ……。ところで、あんたは親戚かなにかかい？」

「ええ、そうです」

「そうかい。頑張りなされよ」

「ありがとうございます。お婆さん」

だが、たとえ怪しまれても金髪のおかげで誤魔化すのは容易い。

いざとなれば、『ムーンチャイルド』で催眠にかけてしまえばいい。

そして、段々絞れてきた。

彼女の名前はまだわからないが、どうやら遠見市の大型マンションに住んでいるらし

い。
近隣住民は、橙色の大型犬を連れていたり、いくらか年の離れた女と歩いているのを散見したそうだ。
彼女らはどうも謎が多いらしく、住民もそれ以上のことは知らなかった。
このまま聴き込みを続けても収穫は無さそうなので、ヨシュアは直接そのマンション行ってみることにした。
そのマンションの正式な名前は遠見マンション。
市で一番大きいからか同じ名を冠している。
エレベーターに乗って少女の部屋のある階へ降りる
部屋番号はすでに近隣住民から聞いていた。
横のインターホンを鳴らそうとしたとき、
「家になにかご用かい？」
背後から女に声をかけられた。
警戒しながら振り返る。
――年の離れた女か
年齢はヨシュアより少し上くらいに見える。
「このお宅に小学生ぐらいのお子さんがいらっしゃると聞きまして……」

通信教育のセールスマンを装う。
しかし、それは無駄に終わった。
「嘘を言っても無駄さ。アンタがこの世界のスタンド使いなのは知ってる」
その情報を知っている。
ということは、ヨシュア達を襲撃したスタンド使いと繋がっている可能性が高いということだ。
『敵』である可能性が高まったということだ。
「アルフ？その人は誰？」
――なのはを倒した金髪の少女……
「なら、単刀直入に聞こう。オマエ達は敵か？」
その言葉に少女も状況を察したのか、目の色を変えた。
「だったらなんだって言うんだい？」
瞬間、女――アルフの身体が狼に変わる。
――なにッ!?大型犬と年の離れた女は同じ存在だったのかッ！
「だが遅いッ!!すでにムーンチャイルドはオマエに触れているッ!!」
即座にアルフに催眠をかける。
「アルフッ!!」

「オレがする質問はたった一つだけだ。オマエは敵か？答えてくれるなら、今すぐに催眠を解除してやってもいい」
「バルディッシュ」
『ｙｅｓ，ｓｉｒ．　Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ．　ｇｅｔ　ｓｅｔ．』
――どうやら素直に答える気はないらしい
バルディッシュと呼ばれたデバイスから黄色の光弾が放たれる。
ヨシュアはそれを『ムーンチャイルド』で弾き返す。
前回の戦いで、すでにコツは掴んでいた。
「答えることに意味はない」
少女が言った。
『Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ　Ｓｅｔｕｐ．』
バルディッシュを鎌状に変形させて斬りかかってくる。
「無駄ァーーッ！」
一合、また一合と鎌と拳を合わせると、少女の顔が目に入った。
その表情は寂しそうで、いつかの夜を思い出させた。
それがヨシュアの心の中で違和感となって堆積する。
「質問を変えよう。なぜキミはなのはを生かした？」

一番の疑問。
ヨシュアを襲ったスタンド使いは容赦がなかった。
皆、彼の命を狙って襲ってきた。
倒れ伏す『敵』を目の前にしてとどめをささないなんていう甘いことはしない連中だった。
「なぜその鎌でなのはの命を刈り取らなかったのだッ！」
「そ、それは……」
彼女は見るからに動揺した。
その隙に『ムーンチャイルド』で蹴りを叩き込む。
「ううっ！」
壁に激突し、気を失うことはなかったにせよ、少なからずダメージを受けた。
――やはりそうだ。
ヨシュアのなかで疑惑は確信へと変わった。
「それはキミが、『敵』ではないからだッ！」
「え？」
「キミは表面的には『敵』に見える。だが、本質的には『敵』ではない。なぜならキミには覚悟がない。覚悟した者は敵であるかという質問に意味がないなんて答えない。殺

すことに迷ったりはしない。真の『敵』は別にいる」
根拠には乏しい。
だが、ヨシュアは頭ではなく心で理解した。
こんな寂しい顔する少女があのスタンド使いらと一緒であるはずがない。
「目的は果たした。オレは海鳴市へ帰る。そこの犬もじきに能力が解除されるはずだ」
「とどめはささないんですか？私はジュエルシードを回収しなくちゃいけない。あなた達の邪魔になるのに」
と少女は言った。
「キミは『敵』じゃあない。『敵』じゃあないのにどうしてとどめを刺すんだ？」
ヨシュアはそう言って、海鳴市へ歩き出した。
少女の名前は聞かなかった。
おそらくそれは自分の役目ではないから。